
月読の塔の姫君 番外編

館野和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月読の塔の姫君 番外編

【Nコード】

N8847P

【作者名】

館野和

【あらすじ】

月読の塔の姫君の番外編集です。

三人称、別キャラ視点の物語。

稀代の魔術師。

それがキースの世間一般での呼び名だった。

強大な魔力を持つて生まれた彼は、さしたる障害もなく若くしてその地位に上りつめた。

生まれの高貴さも後押しして、人々は彼を賞賛する。

けれど、彼にはそんなことはどうでも良かった。

魔術自体は嫌いではない。ただ、大抵の魔術を操れてしまうのが退屈だった。

けれども、そんな彼にも歯が立たないものがあつた。

伝説の

姫君が眠るとされる月読の塔だ。

いつしかキースは、塔の研究に夢中になっていた。

いつか、あの塔の結界を破るのは自分だと信じていた。……異変が起こるその時まで。

その異変に気が付いたのは、塔の結界が突然消えたことからだった。

いかなる者をもはばむ月読の塔。そこには、古の王アークリッドが愛した妃が眠ると言われている。

キースが移動魔法で塔に入ってみると、伝承の通り、イルーシャ姫が眠っているとされる寝台が置かれていた。

ただ、その寝台はもぬけの殻。寝具に残る温もりだけが、たった今まで人が眠っていたと知らせていた。

「これは……イルーシャ姫？」

どこか異質な魔力を辿り、その人物の前に移動してみれば、そこ

には伝承通りの姫の姿があった。

淡い色彩と、可憐さを残す絶世の美貌。

驚いたように瞠目するイルーシャ姫に騎士の礼を取ると、予想もしない反応が返ってきた。

「ああああの、あの……っ」

真っ赤になつて動揺する姿にキースは違和感を覚える。

古の王妃なら、こんな礼で動じたりしないはず。

「なにか変だな。君はイルーシャ姫だよね？」

「人違いですっ」

首を振ってイルーシャ姫が否定する。

姫が言うにはハラダユキという名前でニッポン人だということだった。

聞いたことのない響きに聞き返すと、何度も訂正された。

「もうユーキでいいです……」

どうやっても発音できないキースに、姫の姿をした目の前の娘は仕方なく諦めたようだった。

「話を戻すけど、君は姿はイルーシャ姫だけど、中身はユーキっていう女の子なのか」

話し方から年若い女性という推測をしたが、これは間違つてはいなかったようだ。特に否定もされず、「イルーシャって誰ですか」という疑問だけが返ってきた。

「伝説の姫君。月読の塔の眠り姫だよ」

「はあ、でんせつのひめぎみ、ですか」

どうやら胡散臭いと思われているらしい。棒読みで返すその様子に思わずキースは苦笑した。

「ああそつか。君はまだその姿を見ていないんだね？　なら、信じられないのも無理ないか」

キースは移動魔法で王の居住区に最も近い賓客用の一室に移動する。

「え、ええええっ!？」

「なんだか随分驚いてるようだけど、ひょっとして移動魔法を知らなかったりする？」

「魔法という言葉は聞いたことはありますけど、実際に見たのは初めてです」

「……どういうことだろう。魔法の概念があるのに、実行はされていない？」

力の大きさや、実行できる魔法に差はあれど、世界中でごく当たり前に魔法は使われている。

世界に轟いてる伝説の姫君の名を知らないことといい、この世界には存在しないニツポン出身と言ったことといい、この娘はひよつとしたら、異世界の人間なのだろうか。にわかには信じがたいが、その可能性が高い。

けれど、その前にこの娘にこの状況を知らせなければいけない。キースはイルーシヤ姫の姿をしているユキを鏡の前に連れていく。

ユキは鏡を見てばかんとすると、事態がまだ飲み込めていないらしく、いろいろな動作を試みていた。

おもしろい娘だな。

キースは笑いたいのを堪えていたが、やがて状況を把握したらしいユキが絶叫したので、どうにも我慢できずに爆笑してしまった。
「ちよつと、笑いすぎ。失礼です！」

この美貌で涙目になって抗議する姿は目の毒だ。本人は全く気づいていないようだけれど。

「ごめん、ごめん。まさか叫び出すとは思わなくて。でも、これで状況は理解できたみたいだね。……姫が目覚めたとなったら、王に知らせないとならないんだけど」

そう言ったら、ユキは顔色を変えた。

「わたし、王様に会わないといけないんですか？ それにここはどこなんですか？ わたし、これからいつたいどうなるんですか？」

ユキはだいぶ混乱しているようだ。……無理もない。

「ここはガルディア王国。君から見ればたぶん異世界だよ。ここに

はニッポンなんて国は存在しないしね」

「異世界……？ 嘘……」

ユキが呆然としたようにキースを見る。その目には涙が浮かんでいた。

「……ああ、泣かないで。酷かもしれないけど、絶対に悪いようにはしないから」

突然のことに混乱しているのだろう少女にキースは同情した。

知らない土地に一人で放り出されてさぞ心細いだろう。これからなるべくこの少女の面倒を見るようにしようとキースは心に決める。「そのためにも王と会うことは重要なんだ。いきなり王と対面なんて不安かもしれないけど、僕も同席するから我慢してね」

そつとキースが彼女の頭を撫でると、ユキは頷いた。

早速、カデイスに報告しようとして身を翻すと、ユキに呼び止められた。うつかりして自分の名前を名乗るのを忘れていたらしい。

キースが名乗ると、ユキは「こちらこそ、よろしくお願いします」と礼儀正しく返してきた。それなりに素養のある娘なのかもしれないとキースは思いながら、王であるカデイスに報告に行った。

カデイスのユキに対する態度は、はつきり言って最悪だった。

伝説の姫君が目覚めたら、その代の王か王子が、アークリッド王の生まれ変わりであるという諸説をカデイスは普段からこき下ろしていたので、イルーシャの姿をしたユキと彼を引き合わせればこういった展開も考えられたのだ。迂闊だった。

カデイスの口調は普段でもきつい。その上で、辛辣な言葉を重ねるのだから、キースはユキが泣き出してしまうのではと内心ハラハラしていたが、実際の彼女の反応は彼の予想に反するものだった。

「いくらなんでも、そこまであなたに言われる筋合いはないですっ」「俺にはそう言える権限がある。王だからな」

「へえ、そうなんですか。だとしたらとんでもない暴君ですね。こんな王様を上に乗っている国民が可哀想」

「なんだと、もう一度言ってみろ」

「何度だって言うわよ！ 暴君！ 暴君！ 暴君！ 暴君！」

ここまでカデイスに言える娘もすごいなと、キースは剣呑な空気の中で暢気に感心していた。

「きさま……」

「だいたいなに、目覚めたら見たこともない場所で、伝説の姫君とか言われて、あぐくの果てには二度と目覚めるな？ ふざけんじやないわよ」

彼女の言い分はもつともだ。カデイスは言い過ぎた。

感情が高ぶってきたのか、ユキの瞳に涙が浮かぶ。

「わたしだってね、好きでこんなところにいるんじゃないのよ！ 元の体に戻るなら喜んで戻ってやるわ！ 分かったか、この馬鹿王っ！！」

ユキが叫んだ言葉にキースの思考が停止した。

カデイスに馬鹿王って……。

次の瞬間には、キースは体を折って爆笑していた。

この娘、おもしろすぎる。

ぜいぜいと肩で息をするユキと、啞然とするカデイスを傍目にキースは笑いを治めるのに必死だった。

「キース、この女を追放しろ」

「お言葉だけどね、カデイス。この国にとって貴重な観光資源をみすみす追放させる訳にはいかないね」

なにも知らない彼女を追放など、冗談ではなかった。

そこで、キースはもつともらしい理由をつけて、カデイスの説得

を試みた。

「伝説の姫君が目覚めたことで、この国にもたらされる経済効果は計り知れない。それを他国に持って行かれるかも知れないけど、それでもいいのかい？」

「それは……」

キースがたたみかけるように言うと、カデイスの言葉が詰まる。

「じゃあ、わたしはこの国にとって大切な客人なわけね？　じゃあ、せいぜい丁重に扱ってもらわなくちゃね。よろしくね、カデイス！」
嫌味を含ませてカデイスを呼び捨てにするユキは、いつそ小気味よかった。

弱そうに見えたのに、したたかな面も持っている少女。

先程は礼儀正しかったが、結構口も悪い。

「君もいい性格してるよなあ」

キースは感心したように笑うと、ユキに言った。

「カデイスを呼び捨てにするなら、僕もキースと呼んでもらおうかな。丁寧な言葉もいらないから」

伝説の姫君の姿をしているのに、中身は異世界出身の少女。

その特異性もキースの興味を引いたが、それ以上に少女自身に惹かれた。

口が悪くて、弱いかと思えば強くて、その上やることは思いもかなく、見てて飽きない。キースは、この少女と仲良くなりたいと強く感じた。

「え……と、キース？」

「うん、そう。カデイスばかり親しげに名を呼ばれたら、ちょっと癪だしね」

「誰が親しげだ！」

カデイスが叫んだけれども、キースは笑ってそれをかわした。ユキも呆れたようにこちらを見ている。おそらく、カデイスの意見に同意なのだろう。

その時、扉が叩かれ、キースはその応対にでた。

ふと振り返ると、カデイスと睨みあう少女が見えて、キースは密かに笑った。

順風満帆だけれど、退屈な日々。

それが、あの少女によって変わっていくような予感をキースは確かに感じていた。

「……塔の姫が目覚めたかと？ なにを馬鹿なことを言っている」
にわかには信じがたい報告を従兄弟であるキースから受けて、カデイスは瞠目した。

「信じられないのも無理はないけどね。事実だよ、カデイス。彼女はもうこの王宮にいる」

稀代の魔術師であるキースが言うからには、確かに事実なのである。

しかしなぜ、よりによってこの時期に。

つい先日、非公式とはいえ、エトール侯爵にアイリン姫の輿入れの打診をしたばかりだ。

アイリン姫は愛らしい容貌の持ち主で、純粋な性格、なにより貴族の姫にありがちな人形めいたところがないところに、カデイスは好感を持っていた。

カデイスは舌打ちしたい気分、キースに言った。

「その女をここに連れてこい」

「……ここに？ 仮にも古の王の妃だった姫だよ？ 謁見の間の方がいいんじゃない？」

「俺は忙しい。一人の女のためにわざわざ時間をさいてられない。……分かったら、とつとと連れてこい」

カデイスがにべもなく言い切ると、キースは諦めたように肩を少しすくめた。

「分かったよ。彼女の支度ができたらすぐに連れてくる」

キースが出ていった扉を見やり、カデイスは呻いた。

「……なぜだ。なぜよりによって、俺の時に……」

月読の塔の姫君、イルーシャ。

既に伝説となって五百年の月日がたつ。

正直に言うと、カデイスはイルーシャという姫君に良い印象を持
っていなかった。

アークリッド王をその美貌でたぶらかし妃になった後、謎の魔術
師によって眠りにつき、王のその後の人生を狂わせた毒婦。

それが、カデイスのイルーシャ像だった。

現れたイルーシャ姫は、カデイスの予想に反して、清楚だった。

月光のような緩く波打つ髪と、淡い青の瞳。

確かに絶世の美貌だが、まだ少女と女性の間の年齢に見えるため
か随分と可憐に見える。そして不安そうに揺れる瞳もそれを助長し
ていた。

「あの……」

「なぜ、よりによって俺の代になって目覚めるんだ、おまえは」
なにかを言いかけるイルーシャの言葉を遮って、カデイスは彼女
に苛立ちをぶつける。

周囲の意見におもねて、他人の女だった者を妃に据えるなど冗談
ではなかった。

そう思っただけカデイスが言葉を連ねていると、最初は戸惑っていた
様子の女が突然怒りだした。

「とんでもない暴君ですね。こんな王様を上に乗っている国民が可
哀想」

王としての誇りがあるカデイスには、この言葉は聞き捨てならな
かった。

「なんだと、もう一度言ってみろ」

「何度だって言うわよ！ 暴君！ 暴君！ 暴君！ 暴君！」

「きさま……」

目の前の女のアマリの暴言に、カデイスの全身が怒りで震える。

「わたしだってね、好きでこんなところにいるんじゃないのよ！ 元

の体に戻れるなら喜んで戻ってやるわ！ 分かったか、この馬鹿王
っ！！」

そう絶叫したイルーシャに、カデイスは啞然とした。

なんだ、この女は。

まるで伝説の姫君らしくない。

イルーシャが王である自分を睨みつけてくるのも、カデイスは気に食わなかった。

この騒ぎを聞きつけたのか、途中で宰相のアリストと宰相補佐のイザトがそれに加わった。

「伝説の姫君は随分と個性的な方のようじゃの」
本来諫める立場のアリストが楽しそうに言う。

「……個性的にも程があると思うが。いくら古の王の妃でも現王を馬鹿呼ばわりとは」

「古の王妃ってなに？」

カデイスの言葉に反応したイルーシャが信じられないようなことを口にした。キースが説明すると、今度はアークリッド王って誰という発言をする。

まさか、この女記憶がないのか。

カデイスは内心驚きながらも、辛辣な口調でイルーシャに言った。
「呆れた女だな、おまえは。アークリッド王の人生を狂わせておきながら、その王のことも忘れたのか」

「なに、ひょっとしてイルーシャ姫って物凄い悪女だったりするの？」

「おまえ、何を言ってるんだ。まるで他人事のように……」

「仕方ないと思うよ。実際、他人事だからね。信じられないかもしれないけど、この娘、姿はイルーシャ姫だけど中身はユーキって女の子なんだ」

イルーシャ姫でなく、中身が別人だと？

さらにキースは信じられないようなことを言った。

「……異世界人だと？ なにを馬鹿なことを」

そこまで行くとまさに夢物語だ。

カデイスは呆れ果ててキースを見るが、当人は真面目な顔をしている。

そこでいったんその話は中断となり、場を移動してすることになった。

主立った者を場を陽の間に集め、しばらくイルーシャへの自己紹介が続いた。それが収まると、今度はイルーシャが自己紹介する。

「あ、わたしは由希、原田由希です。日本から来ました」

聞き慣れない発音の単語。どうやらこれが名前らしい。

「……失礼ですが、あなたはイルーシャ様では？」

「ええと、体はイルーシャなんですけど、中身は原田由希なんです」「は？」

三人の騎士団長が訳が分からないという様子を見せたので、イルーシャはどう説明しようかと思案しているようだ。

「見る、キース。こんな荒唐無稽な話、誰も信じないぞ。おまけにこの女が異世界人だと？ おまえ、この女におかしなことでも吹き込まれたんじゃないのか？」

「ちよつと、失礼なこと言わないでよね。それじゃ、まるでわたしがだましてるみたいじゃない」

カデイスの言葉にむつとしたようにイルーシャが反応する。だが、カデイスはそれに冷たく返した。

「実際そうだろう」

すると、有無を言わせない様子でキースが二人の間の険悪な雰囲気断ち切った。

「カデイス、ちよつと黙つててくれないかな」

この従兄弟は温厚そうに見えるが、本気で怒らせると後が怖い。仕方なくカデイスは口を噤んだ。

「ユーキのいた二ホンという国はどんな国なんだい？」

「ええと、日本は四方を海に囲まれた島国だよ。工業が盛んな。一応経済大国って言われてる」

「……島国で経済大国。聞いたことないですね」

「あ、じゃあ、アメリカは？ ロシア、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、オーストラリア」

イルーシャが国の名らしきものを列挙するが、どれにも聞き覚えはなかった。

「どれも知らん。キース知っているか」

「どの国もこの世界には存在しないよ。だから言っただろう、ユーキは異世界人だって」

世界中を移動して見て回っているキースがそう言うのなら確かにそうなのかもしれない。……だが。

「しかし、それもその女の作り話だと言えなくもないぞ」

「彼女はイルーシャ姫やこの世界のことについて知らなさすぎる。実際に鏡で自分の姿を見て驚いてた彼女を目にすれば、カデイスも納得すると思うよ」

キースがそう言った途端、イルーシャは赤面して頬を押さえた。キースがそう言うほど、イルーシャのその時の驚き様は凄まじかったのだろう。

カデイスはイルーシャの顔をまじまじと見つめると、しばらくしてから溜息をついて言った。

「……おまえがそこまで言うのなら仕方ない。一応信じてやる」

正確には信じるしかないといったところか。

イルーシャ姫の中身が異世界の娘だと、稀代の魔術師であるキースがこうもはつきり言っているのだ。

とても信じられないが、そうでなければ、王を馬鹿という古の王妃がいるとも思えない。

それから、カデイスのその発言を皮切りにして食事会へと移行したのだが。

果たして自分の現在の状況が分かっているのだから、目の前に座る女が食事を口にして幸せそうに微笑んだ。

随分と旨そうに食べるのだな。

カデイスは一瞬、イルーシャへの反感も忘れ、彼女に見入ってしまった。

本人は気がついていないらしいが、周囲の人間も微笑ましそうにそれを見ている。

いつもこんな顔をしていれば可愛げがあるものを。

カデイスは目の前のイルーシャのにやかな顔を見つめながら思う。

それから話題はイルーシャの言語能力についてになり、書取は自信がないとイルーシャがこぼした。

「おまえには専任の教師をつけてやるから安心しろ。たっぷり絞らせてやるから覚悟しておけ」

今までの鬱憤を晴らすようにカデイスが言うと、イルーシャは情けない声を出した。

どうやらイルーシャは学ぶのがあまり好きではないらしい。

「勉強はやるけど、できれば元の世界に帰りたいんだよね……」

幸せそうに食事をしていたかと思えば、今度は溜息をつきながらイルーシャが言った。

……帰る？ この女が？

そう思った途端、カデイスの胸に妙な痛みが走った。

「……しかし、妙な期待を持つより、帰れないと思っておいた方が賢明ではないか？ そんなことを考えていたら、いつまでたってもこの環境に順応できないぞ」

なぜかこの時、カデイスはイルーシャを帰したくないと思ってしまっていた。

気づいたら、先程とは真逆のことを口にしていた。

「この女が貴重な観光資源ならば、無理に返すこともないだろう」

そう言うと、イルーシャが涙をはらはらと流し始めたのでカデイスは驚いた。

「ご、ごめんなさい、わたし……っ」

「……なにを泣いている。別に泣くようなことではないだろう」

まさか泣かれるとは思っていなかったカデイスは動揺して言った。

「わ、わたし、もう部屋に戻るね。食事ごちそうさま」

キースが移動魔法を唱えてイルーシャが部屋に戻ると、皆からの集中攻撃がカデイスに浴びせられた。

「陛下、あれではいくらなんでもイルーシャ様がお可哀想です」

「陛下はイルーシャ様を嫌っておられるのですか？ それにしてもあのおっしゃり様はどうかと思われます」

「陛下は少し女性に対する言葉遣いを考えて口にする必要があります。うじゃの」

「それにはわたしも同意しますね。陛下は女性の扱いをご存じではありませんから」

「陛下……女性を泣かせるのはいかなものかと存じます」

「カデイス……、あの娘を泣かせたツケは後できっちり払ってもらうよ」

こうして、カデイスにとっては散々な形で食事はお開きになった。

「帰りたい」

イルーシャが寝台の端に座って泣いている。

はらはらと涙を流すイルーシャに庇護欲を刺激されるが、けれどそれ以上に。

「帰さない」

「カデイス……」

カデイスはその華奢な手首を拘束し、イルーシャに口付ける。そ

してその上に覆い被さり。

「っ！」

カデイスに思うまま支配されて、イルーシャが声にならない悲鳴を上げる。

「カ、デイス……ッ、お願い、やめ、て……っ」

切れ切れの懇願と、甘い啼き声。

愉悦に浸るカデイスは、イルーシャの白い肌に己のものだという印を刻んだ。

「陛下、おはようございます」

扉を叩く音と共にリイナの声がして、カデイスは目を覚ました。

そして今まで見ていたのが夢だと気がつく。

「……あの女はどうしてる」

入室してきたリイナに尋ねると、彼女はそつなく答えた。

「イルーシャ様でしたら、先程起きていらっしやられて、今湯浴み中でございます」

「そうか」

湯浴みという言葉から、一瞬先程見ていた夢の内容が浮かんできて、それをかき消すようにカデイスは軽く首を振った。

イルーシャが怒る顔。微笑む顔。泣く顔。

カデイスが報告書を読む間もイルーシャの顔がちらつく。

なぜだ。なぜこんなにもあの女のが気にかかる。

「なにかご機嫌斜めだね、カデイス」

次々と浮かぶイルーシャの映像にいらししながら報告書を決裁していると、キースが新たな報告書を提出しにきた。

「あ、あの娘が来たみたいだ。僕はちよつと隠れるよ」

「なんだと？」

聞く間もなくキースが姿を消した後、その言葉通りに、イルーシヤはやってきた。

「またおまえか」

溜息をついてそう言つと、ムツとしたようにイルーシヤは眉を寄せた。

なんの用だと思つていると、その口から出てきたのは、アイリンとの結婚を考え直してくれとの願いだった。

イルーシヤによると、アイリンには想い人がいて、その相手と駆け落ちしようと思ひ詰めていふとのことだった。

しかし、どうやらイルーシヤは本気でアイリンの身を案じて言つてゐるらしい。

この女は、どうして会つて間もない姫の身をそこまで心配できるんだ？

「好きな人がいる、か。それがどうしたというんだ。王族や貴族の結婚は、恋愛感情などとは無縁のものだ。おまえには政略というものが分かつていないようだな」

中身が一般庶民であるイルーシヤは、それがどんなに大事なことが理解できていないらしい。そのことに、なんとなくカデイスはいらつた。

「でも、少なくともカデイスは姫のこと好きだよな？」

無邪気に発せられるイルーシヤの言葉に、カデイスのいらつきは頂点に至つた。

俺がアイリンのことを好きだと？ この女は人の気も知らずに。

先程まで次々と脳裏に浮かぶイルーシヤに苦しめられたこともあり、カデイスは苛立ちを彼女にぶつけた。

「好きとか嫌いとかの問題ではない。本当に口の減らない女だな、おまえは」

カデイスがそう言うと、イルーシャは少し焦ったようだった。それに少し愉悦を覚えながらもカデイスはさらに言った。

「……そうだな、どうしても言うなら、考えてやらなくもないぞ」
「え、本当!？」

目に見えて浮かれるイルーシャに、喜ぶのはまだ早いとカデイスはほくそ笑む。

「アイリンが駄目なら、おまえが代わりに王妃になることになるが、それでもいいか？」

「え……？」

その後のイルーシャは、カデイスの予想通り慌てふためき、自分
は人妻だから王妃にはなれないと叫んだ。

その様子がおかしくて、カデイスはくつと笑い出すと、イルーシ
ヤの腕を引いて抱きしめた。

すると、なんとも言えない柔らかい感触がして、このまま抱きし
めていたい気持ちにカデイスは駆られた。

……なるほど、この体ならアークリッド王が骨抜きになったのも
分かる。

その背を撫でると、途端にびくりとイルーシャの体が反応した。
その時の未知の感覚に戸惑うようなイルーシャの表情に艶を感じ
て、カデイスは心が震えた。

あの表情をもう一度見たい。

そう思っ
てカデイスが背中を撫でていると、思い切りイルーシャ
が罵って暴れた。

「なに人の背中撫で回してるのよ、この馬鹿　っ！」

この女ときたら、口は悪いわ、暴れるわ、とんだじゃじゃ馬だ。
けれど、この女なら退屈しそうにないな。

周囲に相手を決められるのは冗談ではないが、この女ならば王妃
にしてもいい。

カデイスは楽しげに笑みを浮かべながら、イルーシャが暴れるのをものともせず、その柔らかい体を堪能した。

花戦争〜カデイス〜 第一章終了直後

イルーシャは今どうしてるだろうか。
また沈んではいないだろうか。

元の体無くし、自分の世界に戻れなくなってしまったイルーシャ。

周囲に心配させまいと無理に明るく振る舞うイルーシャに、カデイスは心を痛めていた。

弱くはないが強くもない少女を思っ
て公務に身が入らないカデイスを宰相補佐のイザトが咎める。

「陛下、手にされている書類が逆です」

「あ、ああ……」

返事をしながら、カデイスは内心しまったと思う。

この男は仕事は完璧だが、自他共に厳しすぎる傾向にある。これから辛辣な小言が繰り出されるぞとカデイスは覚悟した。

しかし、その口から出たのは意外な言葉だった。

「陛下、そんなに気になるのであれば、イルーシャ様に会いに行かれてはどうですか。このままでは公務に支障が出ますし」

「……なぜイルーシャのことだと分かった」

「気が付かれないようですが陛下、先程からイルーシャ様の名前を呟かれています」

それを聞いて、これは相当重傷だとカデイスは額を押さえた。

「花をどうぞ、お姫様」

「わあ、綺麗。ありがと、キース」

カデイスがイルーシャの様子を見に部屋を訪れると、そんな光景

が繰り広げられていた。

キースから白を基調とした花束を受け取ってイルーシャが嬉しうに微笑む。

……こいつは本当に如才ないな。

おもしろくない気分になりながらカデイスはイルーシャに聞いた。

「……花が好きだったのか？」

「うん、まあ、人並みには好きだよ」

「……なにか、意外だな」

「なにそれ。わたしには花は似合わないってこと？」

むっとしたようにイルーシャが薄紅色の唇を尖らせる。

「そういう意味ではない。おまえは着飾るのも好きではないようだし、あまりこういうのに興味はないのかと思っていた」

着飾るところか、庭師を見て「いいな、動きやすそう」とイルーシャが呟いていたのに驚いたくらいだ。……どこの世界に庭師の格好をしたがる姫君がいるのか。

イルーシャの考え方自体がカデイスの理解の範疇を超えていた。

「花が好きなら俺もなにか贈るが。なにがいい？」

「……うーん、わたし、ここの世界の花の名前あんまり知らないんだよね。……あ、そうだ、オレンジ色の花がいいな」

「橙色？」

「うん、そう。オレンジって明るくて可愛いでしょ」

「おまえが欲しいのなら希望に添うようにするが……なにか似合わないな。おまえなら青や白が似合うと思うが」

「いいじゃない、好きなんだから。……青い花も好きだけどね。デルフィニウムとかルリマツリとか」

「デル……？」

イルーシャは花の名前をあげたらしいが、カデイスには全く理解できなかった。

「……橙色の花だな。分かった」

「あれ、もう戻るの？ お茶くらい飲んでいけばいいのに」

執務室に戻ろうとするカデイスをイルーシャが引き留めた。

「まだ整理しなければならぬ書類があるからな。今日はおまえの顔を見に來ただけだ」

「……なんか、心配かけちゃってみたいでごめんね」

「おまえが気にすることじゃない。ではな」

しゅんとしたイルーシャの髪をそつと梳くと、カデイスはイザトの待つ執務室へと戻った。

「随分早かったですね」

「ああ、顔を見に行っただけだからな」

イルーシャが今キースと一緒にいるかと思うとムカついたが。

「おまえに相談があるのだが、イルーシャは橙色の花が好きらしい。何の花を贈ったらいいだろうか」

カデイスの問いに、イザトが首を傾けて考える素振りをした。

「花……ですか。やはり薔薇が一番無難なのではないでしょうか」

「……薔薇か」

それなら華やかだし、見栄えがするか。

カデイスは少し考えると頷いた。

「そうだな、薔薇にするか」

次の日。

示し合わせたわけでもないのに、なぜかカデイスとキース、二人揃ってイルーシャの部屋を訪れていた。

キースが差し出したのは、黄味がかつた橙色の可憐な花束。

「わあ、サンダーソニアだー、可愛いー！ キース、ありがとう！」

「……鐘草？ それが好きなのか？」

「あ、ここでは鐘草って言うんだー。うん、好きだよ。ここにもあるんだね、サンダーソニア。嬉しいー」

「そんなに喜んでくれて、僕も嬉しいよ」

満面の笑みを浮かべるイルーシャに、キースも相好を崩す。

随分可愛らしい花が好きなのだな、とカデイスは眉を顰めた。…

…薔薇を選んだのは失敗だったか。

「……おまえが気に入るかどうかわからんが……」

カデイスは後ろ手に持っていた花束を差し出す。

「あ、オレンジの薔薇だー。この色の薔薇も可愛くて大好きだよ！ 本当にありがとう！」

手を叩いて喜ぶイルーシャに、橙色の花ならなんでも好きなのではないかと頭によぎったが、カデイスはその言葉を飲み込んだ。

イルーシャは喜んでいようだし、それでいいと思えたからだ。

早く元気になれ、イルーシャ。

こんな花束でおまえが笑ってくれるなら、いくらでも贈ろう。

それからしばらく、カデイスに橙色の花を贈り続けられたイルーシャが呆れたように言った。

「花を贈ってくれるのは本当にありがたいけど、いくら好きって言っても程度ってものがあるでしょ。……悪いけど、次は他の色にしてね」

「……ああ、分かった」

さすがのカデイスも少々落ち込みながら頷く。

ちなみにキースはちゃっかりと他の色の花束も贈っていた。……

やはりこの男は油断ならない。

「カデイスってやるのが極端だよ」

「……悪い」

「別に悪くないよ。でも見てて少し面白かったかもね」

「……おまえ、性格悪すぎるぞ」

「そういうカデイスも結構いい性格してると思うよ」

王であるカデイスの言葉に怯むこともなく、キースがこともなげに返した。

そして、どうやってこの恋敵を押し退けてやろうかとカデイスとキースは水面下で火花を散らす。

花戦争はまだ終わらない。

花戦争〜カデイス〜

第一章終了直後（後書き）

別名、花瓶大活躍。

深淵に眠る姫君 本編44話読了推奨

「イルーシャが目覚めないだ……？ なにを馬鹿な」

昨夜床に着いたイルーシャが夕方になっても起きてこない。

執務に就いていたカデイスがリイナからそう報告を受け、信じられないと言うように首を横に振った。

「陛下、誠にございます。なんどお声をかけても、揺すっても、イルーシャ様の反応がございません」

「……」

思えば、イルーシャは昨日思い詰めて、月読の塔に封印してくれとキースに懇願するまでだった。

どうやったのかは分からないが、イルーシャは自分自身で現実を否定してしまった可能性が高い。

「キースを呼べ。いますぐにだ」

恋敵ではあるが、こういう状況で一番頼りになるのは、従兄弟であるキースしかいなかった。

「はい、かしこまりました」

「……俺がイルーシャの寝室に入っても問題はないな？」

「はい、わたくしたちでイルーシャ様を着替えさせました故、大丈夫でございます。」

「そうか、分かった。すぐ向かう」

俺はそこまでおまえを追いつめたのか、イルーシャ。

彼女を永遠に失ってしまうかもしれない可能性に怯えながら、カデイスは自省する。

だが、今はイルーシャの様子を見るのが先だとカデイスは考え、溜息を付きながら執務室から出、彼女の部屋へと向かった。

カデイスがイルーシャの寝室に入った時には、既にそこにキースがいた。

キースはイルーシャの額に手を当てて、なにかを考え込んでいる様子だった。

「キース！ イルーシャは……っ」

その間から見えるイルーシャはまるで人形のように、思わずカデイスは叫ぶ。

イルーシャが病人であつたとすれば、カデイスも自重しただろうが、今回はまた話が別だ。

カデイスはイルーシャがうるさがって目覚めれば良いのにと願わずにはいられなかった。

リイナ達が普段の衣装に着替えさせたイルーシャは、相変わらず美しい。

ただ寝台に横たわつた彼女が、この騒がしさにも関わらず昏々と眠っているのが少々異様に見えた。

やがてキースはイルーシャの額から手をどかすと、カデイスに向き直った。

「キース、なにか分かったか？ イルーシャにいったいなにかあったんだ」

「分からない。……ただ、驚くほど彼女の魔力が稀薄になつてる。まるで、どこかの空間に吸い込まれでもしたみたいだ」

カデイスは要領を得ないキースの言葉に首を傾げる。

結局分かったことは、キースにもイルーシャがこうなつた原因が分からないと言うことだけだった。

カデイスが更にキースに質問しようとしたところヘイルーシャの求婚者の二人の騎士と、なぜかマーティンまで寝室に飛び込んだ。き

「イルーシャ様が目覚められないとか」

「いったいどうなされたのです、イルーシャ様は」

「イルーシャ様はまさかも目覚められないのですか!？」

マーティンのその言葉に、カデイスは目を剥いて怒鳴った。

「縁起でもないことを言うな!」

「も、申し訳ございません」

「キース様、イルーシャ様をこのままにしているのは衰弱されてしま
うのでは?」

マーティンがうろたえている傍で、内心ではどう思っているのか
は計り知れなかったが、比較的冷静に眠るイルーシャを見てヒュー
イが言う。

他の二名は心配を隠せずにイルーシャを見つめている。

「ああ、それは既にイルーシャの時を止めてあるから大丈夫だよ。
かと言って、このままにする訳にもいかないけれど」

「……なにか方策がありますか」

ブラッドレイがキースにそう尋ねると、その場にいた者全員が一
斉に彼を見た。

「イルーシャは眠る前に過去視の訓練をしていたそうだ。もしかし
たらイルーシャの意識は過去に行っているのかもしれない。……そ
う考えれば、彼女の魔力が稀薄なのも説明が付く」

「過去に……」

思ってもいなかったキースの言葉に、皆が呆然と呟く。

「……仮にそうだとすると、どうやってイルーシャを元に戻すんだ。
自然にまかせるのか? どうなんだ、キース」

カデイスが八つ当たりにも似た調子で、キースに詰問する。

他の三人の騎士達はカデイスを諫めることも忘れてただキースの
動向を見守る。

愛しいイルーシャを元に戻すことが出来るのは、キースしかないな
いだろうということをこの場にいる者達全員が嫌と言うほど感じて
いた。

キースはカデイスのきつい言葉を特に気にした風もなく意識のないイルーシャを見つめていたが、やがて言った。

「……とりあえずイルーシャの魔力を辿ってみるよ。イルーシャがなぜ眠ったままなのかくらいは分かるかもしれない」

彼女を必ず助ける、とはキースは明言しなかった。

それほど、今回の件は稀代の魔術師であるキースにも厄介なのだろう。

不満はあったが、仕方ない、とカデイスが息をついた。

結局はキースがいなければイルーシャは元には戻らないのだ。

「頼んだぞ、キース」

自分にキース程の魔力があれば他の男などにイルーシャを任せないものを。

そこまで考えて、この場にいる騎士達も同じ思いだろうということに気が付き、カデイスは内心で苦笑した。

彼女を救うのが自分ではないことは癪ではあったが、しかしまたイルーシャの笑顔が見られるのであれば、なんでもないことだ。

戻ってこい、イルーシャ。

イルーシャの額に手を当てて静かにその魔力を探っているキースを見つめながら、カデイス達はイルーシャの帰還を心から望んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8847p/>

月読の塔の姫君 番外編

2011年8月13日03時19分発行